

令和7年度第1回総合教育会議会議録 12月19日
(午後3時55分)

総務課長 開会
町長 挨拶
町長 ～以降の進行は町長～
協議事項1「南幌町におけるICT教育の現状について」事務局よりご説明願います。

生涯学習課長 協議事項1 「南幌町におけるICT教育の現状について」を説明させていただきます。本町のICT教育の始まりは、平成2年度から10年間実施された学習指導要領において、中学校技術・家庭科において情報基礎が新設されたことに伴い、平成6年度に南幌中学校にコンピューター教室を設置したことにはじまります。

その後、小学校へもコンピューター教室の設置が進みましたが、2019年に文部科学省が「GIGAスクール構想」を提唱し、小・中学生に1人1台端末と高速大容量ネットワークの整備が進められました。

「GIGAスクール構想」は、新型コロナウイルスの拡大により当初よりも早く進むこととなりましたが、実際の学校現場においては、教員の意識の差により、ICT機器の活用方法に差が出るなどの課題もありました。

これらのことから、令和6年度より地域おこし協力隊を活用した「ICT支援員」を配置し、教員の負担となっている課題などを整理し、授業にどのようにICTを取り入れるか、学校と教育委員会が協力できる環境を整えています。

それでは、「南幌町におけるICT教育の現状について」梶田課長補佐、本間ICT支援員より説明させていただきます。

学校教育補佐 私の方から、GIGAスクール構想のスタートから南幌町におけるこれまでのICT教育の流れを説明させていただいた後、実際に週に1回ずつ小学校と中学校に出向き、教育現場を実際に見ている本間ICT支援員からプログラミング授業の現状と課題、対策について別冊の資料に基づいて説明をさせていただきます。

まず、令和元年度に文部科学省が「GIGAスクール構想」を発表しています。目的としましては、すべての児童生徒に最適な学びを提供するために、①一人1台端末の整備、②高速大容量の校内通信ネットワーク整備を全国一斉に進めるとしており当初は5年間かけて整備する計画でした。令和2年度には、新型コロナの流行により、前倒しで整備が加速することとなりました。国が補正予算を投入し、整備計画が一気に進み、多くの自治体で一人1台端末が2021年3月まで

に配備完了となっております。

南幌町においても「コロナ交付金」を活用し、児童生徒一人1台による学習環境を整備するため、小中学校それぞれにクロームブック端末と電子黒板の導入、ネットワーク環境を構築し、総事業費61,915千円をかけて整備しています。また、この時、プログラミング教育が学習指導要領の改訂により導入されました。

ここまでが第1期「配るフェーズ」としてタブレットの導入が進みましたが、多くの自治体がその活用の壁に直面している状況となっています。そして令和6年度から現在です。文部科学省がNEXTEGIGAとしてGIGAスクール構想第2期を発表しました。

それにより学習用端末の更新が各自治体で進行する中、南幌町では令和8年度に当初導入したクロームブック約500台を更新する予定としています。また、校務のDX化や教員研修と運用支援の充実が求められているところです。

それにより令和6年10月から本間ICT支援員（地域おこし協力隊）を採用し、令和7年からプログラミング授業に参画していただいているところです。

また「ICTを日常授業の中で自然に使う段階」へ移行すること、生成AIをどう教育に生かすか議論が進んでいることから現在、それぞれの自治体において第2期「活かすフェーズ」となっており、自治体判断で大きく差がつくフェーズとなっています。

これにより 第1期で整備された環境を「目的」から「手段」に変え、「使える・使いこなせるICT環境」へ進化することが求められています。

この「使える、使いこなせるICT環境を」構築するため、本間支援員には小中学校に入っていただき、教職員へのAI研修やプログラミング授業のサポートを実施していただいている。

空知管内において、ICT支援員による教職員への生成AI研修や長沼町との遠隔授業など、児童生徒等に対するICT教育がどこよりも進んだ取組ということを、空知教育局からは確認しております。

引き続き、ICT支援員の本間さんより「南幌町におけるICT教育、プログラミング授業の現状と課題、対策」について説明していただきます。

本間支援員

ICT支援員の本間です。宜しくお願いします。それでは、資料の表紙を見ていただき、南幌町におけるICT授業、プログラミング授業の現状という題ですが、最初に申し上げておきますと、本報告につきましては、必ずしもハッピーなものではないことをご了承ください。結論から申し上

げて、表紙で赤い字のプログラミング授業ですが、これができるないと客観的に評価せざるを得ない状況です。

プログラミング教育とはそもそも、何なのかだとか、本当にプログラミング授業をできないといけないのか。というところも含めて、ひも解いてくような資料になっておりますので、次のページを見ていただければと思います。

目次ですが、本日は、お話しの中で、章ごとに「個別最適な学習」「全体最適な学習」を行ったり来たりしながらお話しさせていただきますので、各ページに青と赤で書いておりますので、後ほど見返すときに、今は個別最適についてか、全体最適について話しているのかなあという目印にしながら読んでいただければと思います。

では、その個別最適と全体最適、それぞれの学びとは何か、次のページでお話しさせていただきます。

大きく I C T 教育という枠組みである切り口で 2 つに分けると、個別最適な学びと全体最適な学びに分類することができると思います。

個別最適な学びというのは、児童生徒の個性を、これに応じて個々の才能を伸ばす、伸ばしてあげるというのが個別最適な学びで、もう一つが全体最適な学びというのがあります。これは児童生徒全体の I C T スキルを底上げする教育という風に私は良くこのように表現します。この個別最適、全体最適、それぞれ何を指すのか、具体的に次のページで説明します。

個別最適な学びから、南幌町における活動の最適なものは何かと考えたときに、この「なんぽろスチームラボ」という活動を行っておりまして、これは、総務省が設置を推奨している、いわゆる地域 I C T クラブに相当するものです。

ただ、総務省が I C T クラブを盛り上げると言った時に、コロナ禍が始まって、子どもたちが集まるような取り組みが沈静化してしまったような形になっております。ただ、コロナ禍が収まりまして、今年の夏から本町でこのような活動に取り組んでおります。

ロボットプログラミングや 3 D デザインを通じて児童生徒の個々の才能を伸ばし、イノベーション能力を喚起する、言ってしまうと、例えば、未来のスティーブ・ジョブズを育てることを目的にした自由な教育。

このときの写真には、町長、副町長、教育長が写っており、お越しいただきました。夏休みに 5 日間開催し、延べ 1 0 0 人集まり、賑やかで参加した中には、私の見る限り、この子は 3 D デザインの才能あるなという子も何人かいたり、得たものは大きいなと思います。これが、個別最適な学びで、次のページをお願いします。次は、全体最適な学びについて説明します。全体最適な学びというのは、いわゆるプログラミング授業です。資

料に書かれているスクラッチやGoogle Apps Script、パイソンだとか、色んなプログラミング言語がありますが、こういったものを授業で教えるのが、プログラミング授業です。

目的については、プログラマー集団の育成と書いてありますが、必ずしも将来プログラマーになれるように授業をするのではなく、論理的思考力を育むことを目的にしているのですが、結果的にはプログラマー集団を作るような授業となっています。

本日は、このプログラミング授業にフォーカスを当てて報告させていただき、問題提起もさせていただきたいと思います。6ページを開いていただき、プログラミング授業は、2020年に必修化と先ほど梶田補佐からお話しがありました通り、指導要領が変わり必修化されております。

この必修化という言葉が、少し解釈に幅がありまして、後ほど説明致します。

必修化されたプログラミング授業に対して、南幌町ではあのカリキュラムの取り組みできておりません。つまり、毎日・毎月・何曜日に決まった時間に何の授業でプログラミング教育をやりますということが、まだできてないのです。ただ、問題意識を持った先生はいらっしゃって、散発的にですが、私の方に依頼がきます。プログラミング授業を3週連続水曜日にやってくれないかという、一部の先生ですけれども、こういった散発的な取り組みも行っております。全くやってないかというと、そういう散発的な取り組みの他にも、中学校にも一人意識の高い先生がいらっしゃって、プログラミング授業、ロボットプログラミングの授業の専門の方で、定期的にプログラミング授業を行っていただいているんですけれども、残念ながら来年4月でいなくなるということで、継続的な活動にはならないのかなと思っております。

活動が散発的ということで、次のページを開いていただきまして、青字で、「なぜしないのか、なぜできないのか。」プログラミング授業はなぜしないの？どうしてできないの？お断り申し上げたいのが、これは別に学校が怠っているとか、そういうことを言いたいのではありません。

これは、町全体の問題だと思っております。

私は、学校に詰めていますので、先生たちとの会話の中でヒアリングして、どうしてできないのだろうという話しをするのですが、現状を分析し、3つの要因に分けてみました。

プログラミング授業をしない、できない理由の1つ目、制度的要因。実は、必修化イコール教科化ではないのです。文科省が定めるところで、あくまで、努力義務なのです。努力義務だからしないというのもちょっと消極的かと思いますが、とりあえず制度的要因というのが一つ原因あります。

もう一つ構造的要因、これ専門人材がいません。

構造的要因。私のような専門人材といった場合には、一人はいるのですが、一人で全てカバーするのはなかなか難しい部分がありまして。構造的要因の1つ目がカリキュラム指定の曖昧さです。どの授業で教えるかということです。どの先生が、言い方悪いのですが、どの先生が身を切ることになるのかというのは、これは深刻な問題で、文科省が出している大雑把な方針では、小学校では算数の先生がプログラミングを教えなさい、中学校では技術家庭科の先生がプログラミングを教えなさい。こういうアバウトでありますけれども、こういった基準があります。ただ、それが素直に算数の先生がやりますと言えるかというと、それはまた別問題でござります。

3つ目が現場的要因。教える自信がない、学ぶ時間がない。これが一番先生方の本音ではないのかなと思います。では、こちら3つの要因に対してどういった対処が考えられるか、次のページを見ていただきたいと思います。まず制度的課題です。これは教科化の方針を明確にするとあります。やはり何の授業で行うというのを、学校の先生のスキルだとか、時間もですが、そういう多面的な評価をして、やはりどの教科で教えるべきというのは、定めなければならないと思います。

2番目、構造的課題への対処。ICT教員を使ってプログラミング授業を行う、またはそのプログラミング授業のサポートをするというのは、実際に今、行っていますが、ただどうしてもマンパワーが足りない。1人で全クラス小学校1～6年、中学校1～3年までを私だけで授業をするのはちょっと難しい部分もございまして、そういうところでいうと地域おこし協力隊制度を使ってICT教員を増やしてもいいのではないかというところも視野に入れて、推進体制を整えるというのも一つの方法ではないかなと思います。

教科を定義する。小学校は算数、中学校では理科や技術家庭科などです。3つ目が、一番大きな現場的課題への対処、これは働き方改革を推進することで、先生がプログラミングスキルを磨く時間を生み出しましょうということです。働き方改革でどう余力を生み出すのというと、例えば来年の夏に校務支援システムをクラウド化されますので、先生の生産性も上がるという風に見込まれておりますので、そういうところで余力を作り出していくことではないかと思います。

もう一つはシンプルな提案ですけれども、外部プログラミング研修。オンラインでもプログラミング研修を受けることができますので、そういうところで先生のスキルアップにつながるのでしたら報奨制度なんかでも検討していいのではないかと思います。

これらの課題への対処を反映した「プログラミング教育実施指針」を制定することで、プログラミング授業実践のスタートラインに立つことができるでしょう。次ページです。どのようなタイムスケジュールでプログラミング授業体制の確立を目指すかには検討を要することになるかと思います。以上の3つの対処をどこかで定めなければいけない。プログラミング授業を行うと決めたならば、これらの課題への対処をまとめた指針が必要になると思います。その下に記載しています、「プログラミング教育実施指針」。これは制定を検討する必要があると思います。これがないと何も始まらないと思います。次のページではスケジュール感ですが、教育委員会の一存で決められる話ではなく、もちろん学校がございますから、学校と二人三脚で着実に決めておく必要があると思います。

プログラミング教育をやります、やりませんとなった時に教育指針をいつまでに作成し、それをカリキュラムに落とし込み、そして、試しに行ってみましょうというところは、スケジュール感については、書きこんでいる要検討となっております。

いずれ文科省の方で必修化から義務化になるのかなというところもありますので、そのスケジュール感、その情報にもアンテナを立てて、スケジュールしていくなければならないのかなと思っています。

次のページでは、先ほど梶田補佐からお話をありました通り、G I G Aスクール第2期については、活用の段階にあります。一時期は、コロナ禍でリモート授業が必要だからクロームブックを配ったという配布の段階で、今その反動が来てて、どう活用するかというのはものすごく問われているという状況です。この活用次第で I C T 先進性についてですね、他自治体との差がつくところ、差をつけるチャンスではないかなと思います。I C T に強い南幌を目指して、そこについてもご意見ご判断頂戴したく存じますので、ご意見求めたいところですが、皆様が思うのは、指針を作るというところで本当にできるのかなとか、指針に実効性はあるのかだとか、先生のスキルアップは可能なのか。もっと即効性がある方法はないのか。というようなインクレッションも持たれるかと思いますので、教育委員会として、正攻法ではない部分も多々あると認識しております。

そこで、私含め教育委員会でも幾つかこれを打破する方法論など考えております。次のページで型にとらわれない方法論というところを見ていただければ、勝手に名前をつけてしまったのですが、ホリゾンタルプログラミング教育、これはもうすでにあるものではなくて、オリジナルの理論です。

次のページを見ていただくと、端的に言いますと、生徒の教師制度です。できる生徒は、特定のプログラミング言語においては、私なんかより上で

す。そういう制度が複数あります。

まずその有識児童生徒に先生の役割をしてもらう。子供同士ですから、同じ言葉で話しができるので、それを一般の児童生徒に同じ言葉で伝えるということです。もちろん技術的なサポートは私たち I C T 支援員が行います。

それでは、教職員の役割は何かというと、教え方を教える。その生徒に、教職員は教えることに関してはプロフェッショナルです。このように授業を回していくなら、新しい形で、型にとらわれない授業を回していくならと思います。

こちらメリット、効果がございまして、次のページ見ていただきまして、プログラミング授業ができるスキルを持っている有識教職員を探すのは大変だけれども、できる生徒は結構いると思います。1クラスに一人や二人、見回しても、すぐに、あっこういうことができるなというプログラミングスキルを持つ生徒が見つかりますので確保が容易であり、体制を整えるのが容易であると考えます。

今、教職員は研修や自己学習に時間を割くことなく、その授業に参加して教え方を教えているだけで、逆にプログラミングのスキルを獲得していくと、これが大きなメリットだと思います。いずれ最終的なビジョンではやはり先生が生徒に教えるべきだと思いますので、それまでの先生の育成というか、スキルの習得としても効果があるのかなと思います。

3番目、私のような少し古いエンジニアは、基礎から教える。例えば変数とは何でしょうか。Aに1を入れてBに2を入れる。A+Bは3です。こういう教え方をします。

逆に生徒は、ゴールから入っていきます。このゲームを作りたいというところから入って、そこから頑張るものです。そのプログラミングのロジックは後回しなのです。作って振り返って、あれはこういうコード、プログラミングコードだったんだなということを、学びながらやり進めていくと考えます。同じ世代同士で教え、または教えられると。これによって高い学習効果を生み出す可能性は大いに期待できます。

最後4番目は児童生徒に「教える喜び」を喚起できる。教えることは楽しいというところも知っていただきたいなと思います。

今まで正攻法について指針を作ることをお話させていただきました。

今、型にとらわれない方法も教育委員会では検討しております。ということで、最後のページをご覧ください。ローカルな I C T 教育の宣伝をさせていただきたいのですが、この冬も「なんばろスチームラボ」を開催します。

夏は延べ100人程度集まっております。冬は5日間ありますので、複

数日、5日間連続で予約している方もいます。延べで60人から最終的には100人来ていただけるのかなと思います。

今回の目玉は、3Dプリンターで印刷したクリスマスツリーに、みんなで3Dプリンターで印刷した飾りをつけて、さらにそこにモーターとかセンサーを組み込んで踊らせたり回したりというロボット作り、ここまで踏み込もうと思っています。

かなりにぎやかになると思いますので、お時間のある方はのぞいて頂ければと思いますので、よろしくお願ひします。報告は以上となります。何かご質問等ありましたらというところでお願ひします。ありがとうございました。

町 長 今、ICT教育の現状ということで、お話をしていただきましたけれども制度的なもの、あとは構造的なもの、または現場との対応など、色々なことがあるのかなというようなお話を聞かせていただきました。

私もこのスチールラボに一度視察に行かせていただいたのですが、やっぱり個性がすごく伸びるだろうなというようなことで興味深く見ておりました。一方、興味がある子と、無い子も当然いるので、その差をどうやって縮めていくのかなというようなことも見ておりました。

今、お話がありましたけれども、皆様から何かこのことに関してご意見ご質問などありましたら、お願ひしたいと思います。

久保代理 必修化になっていますが、まだ義務化ではないということでしたが、義務化は、そのうちなるのでしょうか。

教育長 プログラミング教育について次の学習指導要領に向けて今整備しているところです。

久保代理 そうなってくるとやらないといけなくなってくる。その前から準備しておきましょうというのが今日のお話しですね。

武田委員 やはり私も文科省の姿勢が若干曖昧なので、自治体としてもその先取りしてやるのかどうかということを、先日、教育委員の研修の時に、南幌町が地域の部活動の展開の話もありましたけど、結局これも基本的に努力目標みたいな感じで話が振られて、急にいついつまでにやりなさいみたいなお話になってきてるので、次回のその学習指導要領が出る時に、時期まで出るのか、それともやはりまだ様子見みたいな段階なのかというのがちょっと読めないところで、本間支援員もどういうスケジュールを立てたらいいかってというのが、とても迷われて、今回も私が疑問に思っていたことが次々解決される資料でとても分かりやすかったんですけども。現状としての課題というのは、多分ここに書かれていることだと思います。どんな教科の先生がやるのかとか、その研修制度があるとして、その研修制度に参加する時や、その技術的な能力に対して報酬が出るのかとか、これ

は町の課題になってくるのかなと思うのですけれども。あと、やはり町長もおっしゃったように、興味ある子もすごくいれば、やっぱりそうでない子もいるというのを、この義務教育の段階で必修化ということを先々見据えてやることが時期的に最適なのかということを少し疑問には思いました。反対とかではないんですけども、最適な時期ということがちょっと今出ている状況だと読めないので、本間支援員がおやりになっている活動というのはとても素晴らしいと思うし、これを続けて行けたらいいんじゃないかなと思うのですが、その濃度みたいなものに関してはちょっと迷うところかなって感じですね。私が感じたのはそんなところです。

教 育 長 今、論点整理というのが9月に終えて、次の学習指導要領について来年に方向性が決まって、これから学習指導要領を作っていくんですけども、その中でデジタルを使ってリアルを教えるっていうのが謳い文句になっていて、中学校では技術科の先生がプログラミングを教えなさいと言っているのですが、これまでの学習指導要領で技術、家庭科、美術、音楽というのをどんどん授業時数を少なくしていくって、あんまり大事にしてこなかったのです、文科省は。そうしていくと、今技術の免許を持っている先生というのが、おそらく空知全体を見ても5人いないと思います。

では、どうやってその人員を増やしていくのかという、そういう人的な問題と、今までも、技術家庭科を育ててこなかったという部分が、これから問題になってくるかなと。どうやって人員を増やしていくんだろうなという。特別免許を出して、つないでいくのか。何か研修を持って技術の免許を与えていくのか、そういうところも課題になってくるかなと。これがまた大きな問題になって浮上てくるかなというところです。

武 田 委 員 あと教えていただきたいのは、プログラミング授業とあって、高校では情報という教科のが新しく出てきていますけど、これはつながっていく内容と考えていいんですか。

教 育 長 イメージ図では、小学校、中学校、高校とつながっています。何かこのような図で示して。今まで小学校では、あまりやっていなかったのですが、小学校でもプログラミングをしっかりやりなさい。そして中学校で段階的に、高校でというように、段階的につないでいきなさいというのが、今論点整理の中では出ています。

町 長 現場では相当な人材育成も含めて、課題問題があるんだろうなというような気がするんですけども。やはりそれが学校との情報の共有化といいますか、意識の共有化というのか、そこが一番無くてはならないのかなと思います。その辺は、どういう状況でしょうか。学校でのこの議論といいますか、現場での議論。

教 育 長 学校ではこれをやらなきゃならないという話は出るのですが、やはり

得意な先生、苦手な先生がいて、それから年齢層によってもまた、年齢高い先生方、そこまで意識がない。大学でやってきていないというのがあるので、抵抗感があるというのは実質的なところです。得意な先生が代表して、学年全体のプログラミング授業をやってみようかなとか、そういった工夫はやっているところです。

古道委員

人材不足ということで、ホリゾンタルプログラミング教育では、有識児童生徒が教える形になっています。その場合でも、その有識生徒の負担が大きくならないかなというのがちょっと心配です。指導するにあたっての準備する段階で、先生と話をして、どういう方向に授業を進めていくかっていう打ち合わせも必要ですし、すごく、依頼される子とされない子の差が出てくると思います。目から鱗だったのは、ゴールから教えてもらうということです。確かにそういうところもあります。今でも。この間も社会教育関係の委員さんとのお話の中でもあったのですが、今の部活の教え方が違うから、もう俺は教えられないと、おっしゃってた先生もいらっしゃって。ああ、このことは言っているのかなあと。ゴールから教えるというのも、これをやりたい。それは私たちや教員の年配といいますか、ある程度年齢が高い人たちでも、やはりこういうものを作りたいという気持ちが先に来て、そこから、じゃあどうやって作っていくのか、材料はどう調べるのが本当ですよね。ただ、子供たちは純粋にそれを考えないで、純粋にやっていけるようになってきたのかなあと。基礎からやるので。だからすごくこの児童生徒が教えるというスタイルは、いいなって思ったんですけど。ただ、あまり他の授業でこういうスタイルで教えるというのはおそらくないですよね。それはちょっと難しいかなと思いました。アイデアはものすごくいいと思います。

教育長

北海道では、そこまで子供が先生になって教えるというのがなかなか見られないのですが、ちょっと進んでいる県では、福井だとか山口県だとか、授業の中で子供たちが座っていなくて、勝手に動いている。わからぬ所があるから教えてというのが、何か自分で準備するとか、子供がするんじゃなくて、気軽にわかんないから教えてというのは、そういう感じのことはやっています。例えば今回は先生役をやる子供から変わっていって、さっきのここの授業では、ものすごく困り感があって、点数があまり取れない子供だったのが、算数でいきいきと教えているだとか、そういう活躍の場があって先生役が増えていくなど、そういう場面にもつながっているみたいで、あと本間支援員も考えてるのが、恐らくその難しい先生と同じように準備をして教えていくのではなくて、教師は中心にいるんだけれども、そのお手伝いというか、自然発生的な先生という感じでやつていくことをイメージしてるのでなと。

本間 支援員

遊びの延長というイメージですよね。先生ごっこといったら言葉悪いですけれども、教える喜びというところを楽しみに、みんなでワイワイ言いながら、堅苦しくない授業のイメージです。もちろん、その生徒がずっと教えるわけではなくて、今、教育長がおっしゃった通り、交代交代でできる生徒が教えるという形をとると、一人の負担というのを減るのかなと思います。

久保 代理

リーダーというかキャプテンというか。部活でやっているようなことですか。

本間 支援員

そうですね、積極的な子が I C T 番長みたいな。

武田 委員

授業ではないですが、最近、学芸会とかでダンスをやるじゃないですか。若くない先生はダンスを教えられないから、ダンスが得意な生徒が出しど物を全部考えて教えてということをやっていたので、多分イメージとしてはそんな感じなのかなという風に受け取ってはいました。

久保 代理

こうやってプログラミング、A I 等々、こう I C T が進んでいくって、今後南幌町としてどうなっていくのかなと、どうしていくのかというのを感じになってしまったのですけど、どうでしょうか。

町 長

我々も年代的に I C T については、なかなかちょっと入りにくいところがあるのですが、避けて通れないことだと思います。役場もデジタルの専門部署ができています。行政としてもそんな形で進んでいくのだろうなと思います。子供たちも当然そういう形で進んでいくんだろうなというように思います。

この I C T 教育、今日ここで何をどうするか、こうするかということを決めるのは難しいのかなと思います。今、本間支援員が役場に配置されまして、現状というか課題というか、こういうことを洗い出していただいだので、これについては、現状の把握ということで納めさせていただいてよろしいですか。

委 員

はいの声

町 長

今日の議題については、今後調査を進めていただくということにしたいと思います。それでは、次の議案に移らせていただきます。2番目の項目のその他。

生涯学習課長

別冊ですけれども、部活動の資料をご覧いただきたいと思います。これまで、中学校の部活動の地域移行について説明をさせていただいておりますけれども、現在、なかなか進まない地域等がございまして、部活動の地域移行から地域展開という形で進められておりますので、現在の中学校部活動が、どういう状況になっているかという部分を、社会教育課長補佐から報告をさせていただきたいと思います。

社会教育補佐

続けて説明をさせていただきます。お手元の資料1枚おめくりください

い。中学校の部活動の現状、そして少年団の現状ということで、1ページ目、2ページ目にまとめてございます。こちらの方は前回令和5年度に総合教育会議にて報告をさせていただいた部分からあまり大きく変わってございません。中学校については、吹奏楽部、美術部、こちらの方の入部者が安定しておりまして、小学校の時にスポーツ少年団に入っていたなかつた子供たちの選択肢、受け皿となっているところが見受けられます。少年団につきましては、1年生の人数が非常に増えているのですが、まだ少年団に入るのを様子見ということで12%に留まっております。

おそらく2年生、3年生になって学校生活が安定した中で選択をしていただけるのではないかというふうに期待をしているところでございます。

1枚おめくりいただきまして、上に3番と書いてある3ページ目でございます。

部活動地域展開に向けた運営ということで、従前から私ども南幌町では少年団本部を受け皿として小中9年間、継続指導できる体制を理想としてきました。その中で柔道クラブ、そして女子バレーボール南幌VCはその先駆けとして、今も活発に活動されております。

そんな中で今年に入りまして、新たに近隣市町と連携した部活動拠点校方式ということで、左下の枠組みでございます。こちらの方は地域に完全移行する途中段階として非常に有効な選択肢であると考えております。南幌中学校のみの部員では大会に出場できない、安定した活動が難しい状況の中で、しっかりとその種目を教えられる先生がいる。そして近隣と連携できる体制が整っている。特に部活動顧問とのやりとりがある。そういった場合において、南幌中学校を拠点として、拠点校の拠点として、その途中のプロセスとして拠点校型部活動を実施するというのは非常に有効であると考えております。もう1枚おめくりいただきまして、5ページお開きください。こちらが、今、現状の中学校部活動と地域クラブの状況を図示したものでございます。まず右側でございます少年団本部、こちらを上部組織として地域クラブ化している団体が4クラブございます。予定のクラブも含みます。そして左側が中学校部活動ということで、バドミントン部については、土日はバドミントン少年団が教えておりまし、男子バスケットボールについては中学校部活動の顧問が週に一度少年団の方にも指導に来てくれています。また、吹奏楽部・美術部については担当顧問がしっかりと活動をしているところでございます。下段の方、拠点校型部活動ということで、サッカーチーム、女子バスケットボール部が来年度から拠点校型部活動に移行する予定でございます。最終ページ、将来ビジョンというところでございますが、当初の理念の

中で生徒の部活動を停滞後退させないということを第一の目的にして、現状に適した運営体制、拠点校なのか地域クラブなのかというところでございますが、柔軟にそちらの方を選択して持続可能な運営体制とするということで、この機会をチャンスと捉えて地域人材の発掘活用につなげていきたいと考えてございます。報告については以上でございます。

町 長 地域部活動の関係についてご報告がありましたけれども、この件について、皆さま方からご意見、ご質問はございますでしょうか。うちの方も段々、環境が揃って整いつつあるのかなということで、まだまだ課題があるかと思いますけども、子供たちのこういう環境については発展的に、これからも進めていかなければならぬと思っております。そのようなことで、この件についてはよろしいでしょうか。

委 員 はいの声

町 長 それでは、4番目のその他。

総務課長 私から、次回の日程につきまして、協議する案件があった場合は、開催させていただきたいと考えております。また、その際には改めてご連絡させていただきますので、よろしくお願ひ申し上げます。以上です。

町 長 全体を通して、皆さま方からお気づきの点はございますでしょうか。何もなければ、これで会議を閉じさせていただきますが、よろしいでしょうか。

委 員 はいの声

総務課長 それでは以上をもちまして、令和7年度 第1回南幌町総合教育会議を閉会させていただきます。お疲れ様でした。

午後4時50分 閉会